

塔のまわりに円柱を配しギリシャ神殿風外観に —演劇練習館に再活用 of 旧稲葉地配水塔—

■名古屋市の給水人口急増に対応

1933(昭和8)年水道使用は、人口増加と生活の向上により年々増加し、従前の人口100万人分を150万人分として需要に適した施設が求められた。配水能力は依然半分に過ぎず、水圧の低下が生じて使用者に不便や防火衛生上憂慮すべき事態となった。そのため第4期拡張事業で「配水管拡張計画」を策定し、この計画のなかで名古屋駅西部方面の水圧低下を防ぐために稲葉地配水塔の築造することとなり、1934(同9)年認可された。

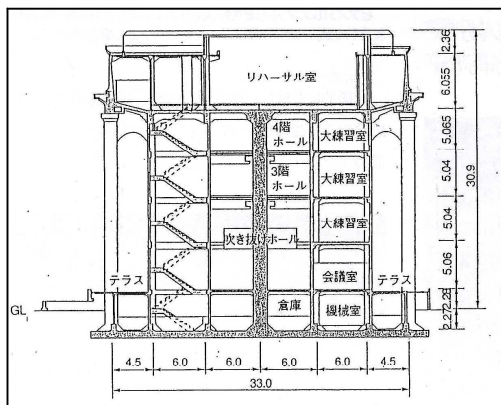
■設計変更で水槽の容量を7倍に増大

配水塔の計画は、東山配水塔を拡大した形状で名古屋市2番目の高架水槽として市水道部成瀬薫が設計した。ところが黒川、堀川両沿岸の住居地と名古屋駅北部及び堀川西部一帯の地域の発展が目覚ましく、使用水量の激増が予想されたことで設計変更された。配水塔の水槽容量を590㎡から4000㎡の7倍程に増大させた。水槽は、直径33m、高さ7m、深さ5.175mの鉄筋コンクリート製で、半径4.5mの心柱と円筒状の輪壁を造り、地上4階、地下1階の建物に、さらに外側に円周上に円柱(補強柱)16本(直径1.5m、高さ20m)を建て、それらの円柱と輪壁で約4000トンの水槽を支える構造に変更した。設計変更により外周の16本の円柱で、市民の命を守る貴重な水を天に向かって捧げているような姿で、古代ギリシャの円柱神殿風の外観となった稲葉地配水塔は1937(同12)年5月竣工した。

■市民の要望で生まれ変わった配水塔

戦時体制で南部に軍需工場が多く、水需要の逼迫にしており、あらゆる手段を講じてでの配水塔築造であったが、大治浄水場からの送水が始まれば不要となる運命であった。1944(昭和19)年周辺区域の配水管増強が完了したことで7年間の配水塔の役割は終わった。1965(同40)年に中村図書館として改修され、1991(平成3)年まで活用された。改修の留意点は①外観は保つ、②吹き抜けを残す、③地震対策を施して全国的珍しく円形の図書館に生まれ変わった。その後西尾市長と劇団の天野鎮雄氏との対談で「練習する施設がない」と言われた。演劇等の公共練習専用施設の改修工事が行われた。1995(同7)年に名古屋市演劇練習館「アクテノン」として、再生利用された。「アクテノン」とは演劇の「アクト」と水の「アクア」、古代ギリシャの「パルテノン神殿」を合成した愛称で親しまれている。

■土木施設の再生利用の重要かつ貴重な事例



名古屋市演劇練習館の断面図 出典：名古屋市演劇資料館紹介資料

講演会関連パネル



建設中の稲葉地配水塔 提供：水の歴史資料館



旧稲葉地配水塔 筆者撮影



水槽を支える心柱と仕切弁 筆者撮影

- ・1982年日本建築学会「建築学的に重要な約2000棟」の一つ
- ・1989年名古屋市の「都市景観重要建築物」に指定
- ・1996年名古屋市都市景観賞を受賞
- ・2014年土木学会選奨土木遺産に認定

(大橋公雄)